

まえがき

本報告は、文化庁の委託を受けて行った調査研究事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業（茨城県）」の報告書である。全体は三部構成となっている。第一部では本事業の概略等を述べた。本報告書が、どのような目的で何に取り組んだのか、またその結果について概観していただけるものと考えている。本報告の要は、第二部の被災地方言の記録(談話資料)である。そこには、暮らしの中で受け継がれてきた生活の知恵として、災害時に役立つ知恵が生き生きと語られている。また、方言でつながる共同体の力強さや家族を思うやさしさを感じることができる恰好のものとなっている。「文化としての方言・絆としての方言」の資料として、ぜひとも若い世代の方々にも、手に取って見てほしいと思う。各調査地点の談話資料には、各調査地点の方言の特色が調査に基づいた記述として添えられており、方言研究文献としての側面も備えている。第三部の前半では、東日本大震災で被災された方と、支援をされた方のお考えを、方言という視点から見るができる。いずれもアンケート形式の調査だったが、被災された方からはとりわけ多くの記述の回答をいただくことができた。それによって被災された方々の貴重なお考えや思いを知ることができる。後半では、第二部とは違った形で、震災直後の状況や今後の災害時に役立つ行動の記憶を、聞き書きとして収めた。これもまた、ぜひ、ご一読いただきたい。さらに巻末資料編では、茨城方言・関東地域方言文献目録を収めた。この文献目録には、利用者の便を考え、茨城県内の大学図書館、公共図書館および国立国語研究所における蔵書情報を入れた。以上、第一部から第三部、および資料編によって、多角的な取り組みの報告書となったと考えている。

東日本大震災から間もなく2年になる。茨城県でも、津波被害で家を失ったまま、仮住まいを続けておられる方がいる。また、隣県の福島県を中心に茨城県内に避難されてきている方々もたくさんいらっしゃる。福島県も茨城県も、原発事故以来、農業においても漁業においても大きな痛手を受け、そこから回復できていない。この度、文化庁の委託を受けて茨城県沿岸部の最北から最南端まで歩き、また、福島県から避難されている方々との出会いをとおして、改めて大震災・原発事故の傷の深さを痛感した。そして、このような厳しい状況が続いているときに、方言調査よりも先にやらなければならないことがあるのではないかという思いや、このような想像もできなかった状況の中で、方言はどれほど人々の支えになっているのだろうかという疑問が心から去らなかつた。その一方で、何年何十年先を考えたとき、今自分がすべきことは、方言の力を信じて、人々をつなぐ暮らしのことばとしての方言で、震災の記憶、先人の知恵、それぞれの土地の暮らしの記録を残さなければならないとも強く思った。昨夏より今日まで、このような葛藤を抱きながらも、ご協力くださった多くの方々を思いながら、今、私共にできる精一杯の力でこの事業に取り組んだつもりである。「今だから、こうやって笑って話せるけどね」と前置きしながら、震災の時の恐ろしかった記憶を語ってくださった皆様、わざわざ地域の方言を書き留めて用意して方言調査においでくださった方、図書館で土地の方言を調べてコピーを渡してくださった方、将来を展望しにくい状況ながらも、方言のアンケートにていねいにお答えくださった被災された多くの皆様。このような方々に支えていただき、また、そのもったいないほどの温かさのおかげで、どうにか本報告をまとめ終えることができた。調査にご協

力くださった多くの方々に感謝するとともに、いろいろな形で本報告をご活用いただけることを願っている。

以下に、本事業にご協力くださった自治体等の皆様、ならびに調査に快く応じてくださり、お名前を挙げることをご承諾くださった個人の皆様のお名前をここに記して、感謝申し上げます次第である。

《自治体等団体》

茨城県教育庁文化課、水戸市教育委員会文化課、北茨城市教育委員会生涯学習課、高萩市教育委員会生涯学習課、日立市教育委員会郷土博物館、大洗町教育委員会生涯学習課、鹿嶋市教育委員会教育総務課、神栖市教育委員会文化スポーツ課、つくば市総務部総務課、つくば市教育委員会教育総務課、茨城県内への避難者・支援者ネットワーク・ふうあいねっと、国民宿舎鶴の岬、龍蔵院（鹿嶋市）

《個人のご協力者の皆様》（五十音順、敬称略）

飯田敏雄、石毛美智子、伊藤甲ふ子、伊藤軍司、稲野辺ケイ子、稲野辺敏夫、印南春子、宇佐美泰重、大内茂義、大内章子、大谷和巳、大森京子、小田かつ子、神崎勝男、川上 悦、菊池雅子、菊池雅彦、佐藤悦子、鈴木章郎、鈴木和代、鈴木マス子、高橋早苗、夏井豊子、滑川京一、袴塚千鶴子、袴塚義之、稗田 進、山形貞治、山形サチ子、矢渡比佐子、綿引長夫

最後になってしまったが、研究補助員として調査地点の情報整理・文章化や、各種調査データの取りまとめなど、本事業の全般にわたってサポートしてくださった八木尚美さん、方言文献収集・整理、データの入力、原稿チェックなどを誠実に手伝ってくれた学生・大学院生の香山早貴さん、佐藤沙耶佳さん、楊 芙蓉さん、李 云亭さんにも、ここに記して感謝したい。

平成 25 (2013) 年 3 月

茨城大学人文学部 杉本妙子